

# 日本有数規模の女子大学となった今も 「人を大切に作る大学」であり続けたい。



2010年4月1日、同志社女子大学の新しい学長に、現代社会学部社会システム学科の加賀裕郎教授が就任されました。加賀新学長の専門は教育哲学、道徳哲学。同志社女子大学の教育理念に基づく21世紀型の教育、2000年から10年間をかけて進められた学部学科の再編、さらには女子大学の存在意義などについて、たつぷりとお聞きしました。

**現実の中で生きる  
「21世紀型教養教育」を目指します**

——学長に就任されて半年、どのような日々を送っておられましたか。

加賀 あわただしい毎日でした。正規の業務に加えて、関連学

校や協定を結んでいる多くの大学へご挨拶にも行きました。時間があれば同窓会の支部会へ出席するようにもしています。同窓会の支部は全国に根を張っており、それに支えられて大学があると思っておりますので、今後も大切にしたいですね。

——同志社女子大学の教育理念は「キリスト教主義」「国際主義」そして「リベラル・アーツ」です。就任時、学長は、21世紀的世界のビジョンを切り開く人材をどのように育てるかという課題に対し「21世紀型リベラル・アーツ・カレッジの建設」をもつて応えるべきだとおっしゃいました。この具体的な内容を教えてください。

加賀 21世紀に入り、時代は大きく動きつつあります。その一つがグローバル化で、従来にはあり得なかつた状況が、国際秩序の中で起こってきています。「地図のない時代」と言えるかもしれません。

独立国家が増えたことによる紛争が起き、これまでの生産中心の社会構造も変わりつつある。もはや世界は「違う時代」に入りつつあるのです。そんな時代に主体的に対処していくのは教養の力、21世紀型教養の力だというのが私の考え方です。大学はそれを養う場とならなければいけないのです。

これまで「教養」とは、個人が人格の中で積み上げていくもの、「職業」と対立するものとして捉えられてきたように思います。しかしそれは、文化を享受するエリート層と労働者層とが分極化していた時代の古い考え方であり、21世紀の民主的会社にはそぐわないと私は考えています。21世紀の教養教育とは、

職業教育と対立するものではなく、職業も射程に入れたものでなければならぬと思います。たとえばキャリア教育などはその一例でしょう。

実社会との連携によって学びの場を学外にまで広げ、学内での学びと総合して「社会の中で生きる学び」を展開していくことも今後の教養教育には必要だと思えます。同志社女子大学の場合、理系学部では病院や医科大学、文系学部なら教育委員会やANA総合研究所などと協定を結び、さまざまなプロジェクトを進めています。このような「現実の中に生きる教養教育」を、カリキュラムの中でさらに強力に推し進めていきたいと考えています。

——「キリスト教主義」「国際主義」という理念は、大学の中でどのように生かしたいと考えておられますか。

加賀 キリスト教主義は、同志社女子大学の日常生活の中に深く根付いています。毎朝礼拝がありますし、牧師の資格を持つた教員がキリスト教の専門科目を担当しています。カリキュラム上でも「聖書」の4単位が必修となっています。クリスマスや創立記念日の前には必ず礼拝が行われ、宗教部主催のワーク・キャンプも長年続けられています。130年の歴史の中で受け継がれてきた、日常的にキリスト教に触れられる雰囲気のもとで4年間を過ごすことによつて、たとえば生命を大切にすること、「良心」を持つて物事について考え、判断し、行動することの大切さを学ぶことができるのではないのでしょうか。

同窓会においても、開会時と閉会時には必ず讃美歌が歌われています。同志社女子大学で身につけたキリスト教の精神は、



加賀 裕郎  
【かが ひろお】

同志社女子大学学長

1955年3月1日生まれ。

同志社大学大学院文学研究科 哲学  
及哲学史専攻 博士課程 単位取得  
満期退学。

文学修士（金沢大学）、博士（哲学）  
（同志社大学）

1986年4月女子大学着任。教務部長、  
入学センター所長などを歴任。  
2008年4月より現代社会学部長兼  
国際社会システム研究科長を務める。  
専門分野は教育哲学、道徳哲学。現  
在の研究課題はジョン・デューイの  
哲学・教育学。

主な著書に「デューイ自然主義の生  
成と構造」（晃洋書房、2009年）、「現  
代哲学の真理論—ポスト形而上学時  
代の真理問題（編著）」（世界思想社、  
2009年）ほか。

卒業後も生き方の根本に影響するものだと思います。

国際主義については、英語英文学科、国際教養学科を核とし  
て、国際理解のためのカリキュラムを展開しています。国際教  
養学科ではほとんどの授業が英語で行われ、1年間の留学も義  
務付けられていて、英語力の面での成果はTOEICのスコア  
などに顕著に表れています。

世界中に39ある協定大学への中・長期留学制度や海外研修プ  
ログラムも充実していますが、カリキュラムその他の面を、在  
任中にさらに充実させたいと考えています。

**各学科の内容を点検し、  
さらに充実させていきます**

——同志社女子大学は2000年度から学部学科の再編に取り  
組んできました。学長として、その成果についてどのように評

価しておられますか。

**加賀** 2000年度からの取り組みによって、同志社女子大学  
は5学部10学科、学生数約6200人という日本有数の大規模  
女子総合大学となりました。文学部、家政学部といった女子大  
学旧来型の学部構成から、社会科学系、自然科学系、情報系、  
国際教養系といった、若い女子学生の多様な関心に応えられる  
分野を網羅した構成となり、学びの範囲が広がったことは一つ  
の大きな成果であると考えています。まだ卒業生が出ていない  
学部学科もありますが、量的拡大を目的とした整備はひとまず  
完成したと言えるでしょう。

ただ急速に拡大したという面もありますので、今後は各学科  
の内容を常に点検し、充実させていくことが課題となってくる  
と思います。その中で大学全体の教育にとってプラスであると  
考えられるものについては機動的に改組する。それが私のスタ  
ンスです。

——薬学部は開設5年目を迎え、国家試験の結果などで大きな成果が出ています。同志社女子大学ならではの薬学教育についてのようにお考えですか。

**加賀** これまでになかった分野の学部であるため、開設当初は大学の中で孤立してしまわないか、少々心配もしていたのですが、5年目を迎えた今、薬学部の学生が大学の風景の中になじんできたと感じています。宗教行事やサークル活動などに参加する学生も増えてきました。単科大学にはない、さまざまな学生の中に溶け込んでいく経験は、将来薬剤師として患者さんと向き合う上で大きなメリットとなることでしょう。

新島襄は同志社に医学部を作りたいという願いを抱き、京都看病婦学校や同志社病院を作りました。キリスト教精神で悩みを持った患者さんに向き合える薬剤師を育てることが、同志社女子大学ならではの薬学教育だと思っています。その成果は少しずつ現れ始めているのではないのでしょうか。

### 女性をエンパワーするのが 女子大学の大きな役割だと思います

——新島襄が抱いていた女子教育への思いを、今どのように感じておられますか。

**加賀** アメリカに渡った新島は、まず男子校であるフィリップス・アカデミーで学びましたが、当時、同じく中等教育を行う女子校も存在しており、新島もその様子を見聞した可能性があります。女子に教育など不要という儒教的考えが支配していた

当時の日本との違いを痛感し、日本でも女子教育が必要だと強く思ったのではないのでしょうか。

また新島は、亡くなる直前に、社会改良団体であるキリスト教婦人矯風会の女性幹部、佐々城豊寿と会い、「あなたたちは断然、世の改革者、いや、改良者となられよ」と激励しました。女性に学問の門戸を開くという意義はもちろんのこと、道徳的な視点からも、女子教育の必要性、重要性を感じていたのではないかと、今改めて考えています。

——同志社内において、また一般社会において、女子大学の存在にはどのような意味があると考えておられますか。

**加賀** 同志社における女子教育は、1876（明治9）年に、A. J. スタークウエザーが新島八重と始めた女子塾にさかのぼります。同志社英学校の開設は1875年ですから、その翌年に早くも同志社の女子中等教育は始まっていたのです。女子塾は同志社女学校と改称された後、その卒業生が学ぶ高等教育機関としての専門学部を併設しました。その専門学部が発展したものが同志社女子大学です。つまり、中等教育機関である同志社女子部」の長い伝統の上に立っているのが同志社女子大学なのです。そのため、同志社女子大学には同志社大学とはまた違う特有の雰囲気や校風が伝わっており、同志社の中でも独自の存在であると考えています。

一般社会における女子大学の存在意義については、古い時代には女子に教育の機会を与えるという意味がありました。これはすでにその役割を終えたと言えるでしょう。次に、主に高度経済成長期に女性らしさを育む教育機関としての役割を担う

ようになりまして。

そして現在、女子大学の持つ大きな役割は「女性をエンパワーする」ということだと考えています。アメリカでは一般的に、社会で活躍する女性に女子大学出身者が多いと言われていますし、女子学生の授業態度などを女子校と共学校で比較した研究によれば、初等教育から高等教育に至るまでの段階で、女子校の女子学生の方が、授業に対し積極的な態度を取っているそうです。共学大学では一般社会と同じく男性中心の社会になりがちなところを、女子大学では女子が主役を担っていくことになるのがその一つの要因ではないでしょうか。女子大学でなければならぬとは思いませんが、女性をエンパワーする一つの方法としては有効であると考えています。

また近年、産業構造が変化し、サービスや福祉の分野でより多くの人材が求められるようになってきています。これらはまさに女子大学が目向け、人材を育ててきた分野。現代社会にこそ、女子大学が存在感を増してゆく可能性があるのではないのでしょうか。

## 教職員と学生の距離が近い 家族的な大学であり続けたい

——最後に、今後学長として取り組んでいきたいと考えておられることをお聞かせください。

加賀 平凡かもしれませんが、「人を大切に作る大学」でありたいと思っています。同窓会に出席していつも感じるのは、卒業

生の愛校心の強さです。大学で過ごすのはわずか数年間。しかし彼女らの人生にとって、それはけっして消えることのない大きな数年間なのです。

教職員の親睦会に退職された先生方が大勢出席してくださいのも、同志社女子大学の伝統です。昨日は退職して20年近くになられる先生が来られ、新島襄がアメリカから持ち帰ったカタルバの木の苗木を女子中高と女子大学に一本ずつ寄付してくださいました。大学を単なる職場としてだけではなく、人生の中心でちゃんと位置付け、生活の場として考えてくださる。それは、新島襄が同志社英学校創立10周年の式典で「一人一人ハ大切ナリ」と語ったように、学生や教職員一人ひとりを大切に作る大学としての伝統があるからだと思います。

この10年間で大学の規模が大きくなり、さまざまな学問分野の先生を外から招きました。ここで改めて、人を大切に作る同志社女子大学の良き伝統を考え、その精神を守り伝えていく努力をしなければならぬと考えています。

一人ひとりが大切にされる大学であるからこそ、教職員は学生に丁寧に関わることができるのです。教員と学生の距離が近く、学生は気軽に研究室へ質問をしに来る、教員は徹底して学生の面倒を見る、それが女子大学の校風です。その基礎となるのが「人を大切に作る」伝統。学長として、それを何よりも大切にしていきたいと考えています。